

試合に勝って勝負に負ける話(梶子様視点編)

どうしてこうなった。

ここは、三一七さんが所属する『技術研修会』の通称『うさぎちゃん倶楽部』...

ではなく、『ルールを守って楽しくデュエル』がモットーの『決闘倶楽部』の闘技設備。同じ『技術研修会』の内部組織ではあるが、まったく正反対の所だ。

そして、わたくし、病葉 梶子の目の前で、屈伸運動をしているのが、その三一七さん。

わたくしはどこで間違えた？

事の起こりはこうだったはず。

わたくしの『大親友』こと夏連木 三一七さんの様子が、どこことなくおかしいなって気づいたのは、たしか5日ほど前。

何か言いたそうに、授業中も、休み時間も、こちらをちらちらと見てくる。

もちろん、自称『大親友』のわたくしとしては、そんな視線は気づかないふりをしてあげるのが礼儀でしょ？

どうせ彼女が持ち込む話なんて、面倒ごとに決まってる。平穏と安寧の微睡を脅かす台風には近づかないに限る。

さすがに5日もたつと、意を決したように、彼女がわたくしの方にやってくる。

「あの...」

「お断りします」

「まだ何も話してないですよ！」

三一七さんは抗議の声を上げるが、とりあうつもりは、ない。

「でね、梶子様にしかできないお願いが、あるんです」

一度話すと決めたら、引き下がるつもりがないらしく、三一七さんは話を続ける。

「足りないんです！」

「何が？」

要領を得ない三一七さんの話に、ついつい聞き返してしまう。いけない、いけない。

「レギオンメンバーです。せとか先輩が先輩のお姉様と構想している戦術を実現させるためのメンバーが！」

せとか先輩？ああ、三一七さんのシュッツエンゲルでしたね。誰彼構わず...ではないようで、どうやら外部生を中心に1年生にもみかんを配り歩いていた先輩として、1年生の間では有名な人だ。

わたくしも1回みかんを頂きましたね。まあ、みかんは九州産の方がおいしいですけどね。

そんなことを考えている間も三一七さんは話を続けている。

「人が、人が足りないんです！」

梶子はちよつと考え直す。

フリーで行くつもりだったけれど、ぬるいレギオンに名前だけ所属しておくってのも、今後のことを考えると良いかもしれない。

三一七さんが入れるくらいなのだから、その可能性は高いんじゃない？

「それにね、うちのはあの『綺羅さま』も勧誘中なんだよ！」

『綺羅さま』？ああ、クラスメイトが騒いでいましたね。でもあれ？『綺羅さま』が勧誘されているレギオンって確か...

「もしかして、トゥアハデダナンですか？今わたくしが勧誘されてるレギオンって」

三一七さんはぶんぶん顔と顔を縦に振る。

ああ、これはだめだ。トゥアハデダナンと言えば、ががつと功績を求めて活動しているレギオンだと聞いた気がする。

これでは思い描いていた学園生活からさらに遠ざかってしまうじゃない。

これは断固阻止。

そうね、どうやったら三ー七さんにあきらめてもらえるかな？

そうだ、三ー七さん、たしか、うさぎちゃん倶楽部に入ってたよね？だったら...

「そうね、デュエルでわたくしに勝てたなら、入ってあげてもいい、かな」

ふふっ、受けないよね？三ー七さん？

「仕方ないです。お手合わせ願います」

あ、あれえ。

「手合わせで勝ったこと、ないですけど、がんばります。お友達と一緒にレギオン活動。あこがれですから」

この子、うさぎちゃん、では、なかったの？

わたくしは肩で息をつきながら、愛用のチャーム、刀剣モードの雷上動を構えなおす。

さすがにタイマン勝負で、得意な弓の間合いは取らせてもらえないのは仕方ないとして、幼いころから武芸百般、とまではいかないものの、それなりの修行を積んできたわたくしにとって、この勝負は楽勝だと思ったのに。

三ー七さんの、どこことなく遠慮がちで力がこもり切っていない、あれを攻撃と言って良いのかも疑わしいチャームのスイングには、まったく脅威を感じないものの、なぜかこちらの攻撃もすべて防がれてしまう。

今もまた渾身の突きを紙一重で躲かれた。その動きに洗練さは感じない。これは、どう考えても数多の実戦経験を通じて身に着けた身のこなしだ。

デュエルで勝ったことがない？本当に？騙された？

もし、その言葉が嘘じゃないとしたら、この子いったいどんな人たちとどれだけデュエルしてきたっていうの？

もう少し、もう少しで三ー七さんのチャームは使い物にならなくなる。そうしたら、この泥仕合も終わり。

そう、ちょっとした気のゆるみ。

そのすきに三ー七さんは予備のチャームに持ち替えてしまった。これで一からやりなおし。

わたくしは本来片手持ちである雷上動を両手で握って三ー七さんをにらみつけた。

やがて

『かーん、かーん、かーん』

設備の占有期限の3時間を知らせるチャイムだ。

「時間切れ...わたしの...負けです」

三ー七さんは、がっくりと膝をついた。

「おら、とっととどきやがれ」

順番待ちをしていた血の気の多い連中に放り出される。

守り切った。わたくしの平穏と安寧。今はただ、心地よい疲労感に包まれていたかった。

翌日。

「お手合わせ願います！」

「レギオンの件ならもう終わったはずよ？三ー七さん、昨日わたくしに勝てなかったよね」

「梶子様、「わたくしに勝てたらレギオンに入ってあげる」って言ってくれましたよね？」

「ええ、言いました。そして、あなたは勝てなかった」

「でも、わたしが負けたら入らない、とは言っていないですよ？わたし、勝つまで頑張ろうと思うんです。卒業するまでには1度くらい勝てるかなって」

卒...業するまで、毎日？

わたくしは、この子と出会ってから、もう何度目になるかわからなくなってしまった妥協をすることにした。